佐伯胖のコンピュータ教育論

総合教育科学科（基礎教育学専修　基礎教育学コース）

伊藤歩桂

　本論文は、佐伯胖の学び観やコンピュータ教育に対する意見の変遷を考察することで、情報技術の発展とともに成長し続けてきたと語られることの多い教育工学の歴史を反省的に捉え直すことを目的とする。

　第１章では、知識の一貫性の重視、学習時の自発的な問いの重要性、「おぼえる」と「わかる」の対比の３点に着目し、佐伯の学び観を確認した。知識の一貫性とは、例えば引き算では必ず数が減るというような一貫した構造があるということであり、CAIによって生徒が知識の一貫性を意識することは、不可能ではないが困難であると論じることができるであろう。また佐伯は学習時に生徒が自ずから問いを持つことを重要視していた。これは教師等が事前に設定した問題を生徒が解いていくだけのCAIとは矛盾した考え方だと指摘できる。さらに、佐伯は「わかる」を「おぼえる」と対比させて議論しており、「おぼえる」ことが「わかる」ために必要な段階であることを認めつつ、最終的な目標は「わかる」ことにあると主張していた。以上の佐伯の学び観を踏まえ、教育目標の明確化を重視していることに着目しながら、佐伯がCAIの利用を支持し研究を進めている様子を確認した。以上より、佐伯は教育目標の明確化を重視し、CAIに注目している点は、一般的な教育工学者らと共通していると論じることができる。一方で、他の教育工学者が教育の効果を高めることを生徒が問題を解けるようになることに単に置き換えて捉えているなか、佐伯は学びとはどうあるべきかという前提に立ち返った点が着目すべき点だといえるであろう。

　第２章では、認知科学について研究した佐伯が、「わかる」ことに関してどのように考えるようになっていったのかを明らかにし、その結果として佐伯がCAI批判に転じる様子を検討した。前章と同様に佐伯は「わかる」における問い直しの必要性を主張していた。また、内発的動機付けの重要性を主張しており、佐伯による「わかる」ということを理解するために着目したい点は①、②内発的動機づけの重要性、③「おぼえる」段階の軽視の３点である。そして、以上の点を踏まえ佐伯がCAI批判に転じる様子を検討し、最後に坂本ら教育工学者らとの違いについて考察したい。

　第３章では、

　以上の議論を通して、

　最後に本論文の課題として、佐伯が教育工学を推進し続けるのではなく、学びとはどうあるべきかという議論に向かった要因を明らかにできなかった点がある。佐伯の学生時代の師である村井実に関する考察を行うことで、佐伯の教育観への影響を明らかにできた可能性があるため、村井実の思想に対する検討を行うことが今後の課題である。また、佐伯に多大な影響を与えた認知科学においても、認知科学者の間でのコンピュータ教育に対する一般的な意見に関する議論が不十分であったため、その点についても検討の余地がある。